

66 発達障害児の視点取得を促すプログラムの検討（経過報告）

秩父学園 地域支援課 杉本拓哉 星美弥子 大門亜希子 安永有紀 新妻里紗

1. 研究の背景と目的

本研究の背景として、近年の発達障害児童数の急速な増加（通常学級の約6.5%）や、不登校の背景としても発達障害が新たに指摘されるようになったことが挙げられる。特に通常学級に在籍する児童の場合、著しい言葉や知的能力の遅れはみられないが、定型的・特徴的なやりとりを行うために同年代の児童からは「変わった子」として映ることが多く、友人関係上の問題を生じやすいことが指摘されている。友人関係などのソーシャルスキルは、一般的な言語能力や知能ではなく他者の視点に立って物事を考える能力、すなわち視点取得能力と強い相関があることがこれまでの研究から明らかになっている。また、発達障害児は、他者の感情や認知面において視点取得の困難さを抱えており、日常生活を送る上で対人トラブルが生じやすいことも分かっている。そこで、本研究では視点取得を養うために有効であるとされる「読解体験課題」と「自己モニタリング」を通して、発達障害児の視点取得を促すためのプログラムを検討している。本発表では、その経過について報告する。

2. 方法

【対象】秩父学園地域療育支援室にて毎週水曜日に実施されている、発達障害児等不登校支援事業ステップ（以下ステップ）に参加している小学5～6年生の発達障害児男女2名及びその母親。研究対象とする4名の児童については、全員が通常学級籍であり、発達検査において本研究プログラムに必要な文章読解能力を有していることを確認した。【実施期間】平成29年8月～平成30年3月（全10回のプログラム実施を予定）【実施手続き】ステップの活動の最後に「振り返り」の時間を設け、その時間を利用して次の2つの取り組みを実施。①読解課題（The Perspective Taking Protocol Employed in the Two Experiments）を日本語に訳したものの中から、乱数生成ソフトを使用しランダムに選ばれた5問を毎回実施。②録画された前週の集団活動場面を見ながら、職員と一対一で振り返りを実施。最初に対象児と職員が個別にチェックリストを使用して、集団活動場面における課題行動の強度について回答し、次にお互いの回答の差異について意見を出し合う。チェックリストは、それぞれの個別支援計画書から、対人場面で想定される課題行動を選択し作成した。【効果判定】フォーマルな指標として、プログラムの開始前と終了後に、各保護者に対して「VINELAND-2 適応行動尺度」「SCQ（対人 コミュニケーション質問紙）」を実施し、その結果を比較する。②インフォーマルな指標として、集団活動場面の中から、毎回類似した場面（例：全体への活動内容説明時）を対象として、課題行動の生起頻度についてインターバル記録法（観察時間5分 インターバル10秒）にて記録し、考察する。

3. 経過（平成29年10月13日 現在）

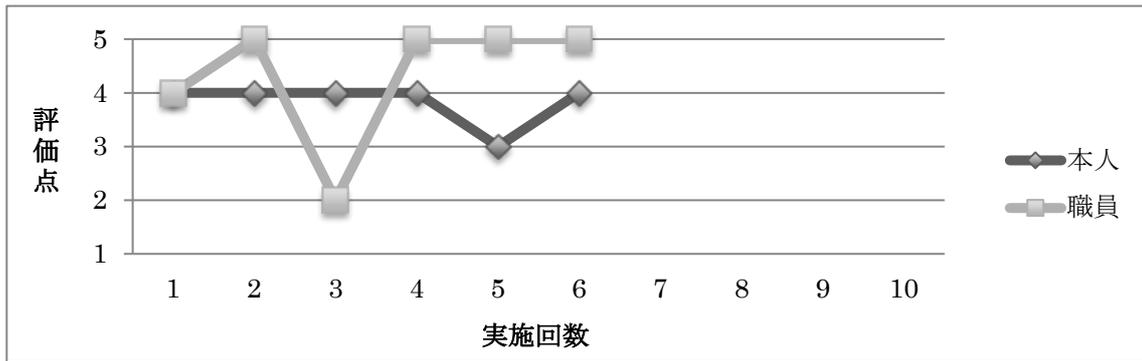
課題行動チェックリストの回答をFig. 1に、課題行動の生起頻度をFig. 2にそれぞれ示す。

4. 望まれる結果

本研究プログラムを通して、自己の行為を視覚的・聴覚的に振り返り、職員と行為の程度について比較・検討する機会を設けることで、対象児が他者視点の「あり方」に気づき、自ら行為の強度をコントロールできるようになることが望まれる。

Fig. 1 課題行動チェックリストの回答

- 対象児 A (課題行動：対人距離 行動の強度：1 ととても近い - 5 ちょうどいい)



- 対象児 B (課題行動：声量のコントロール 行動の強度：1 ととても大きい - 5 ちょうどいい)

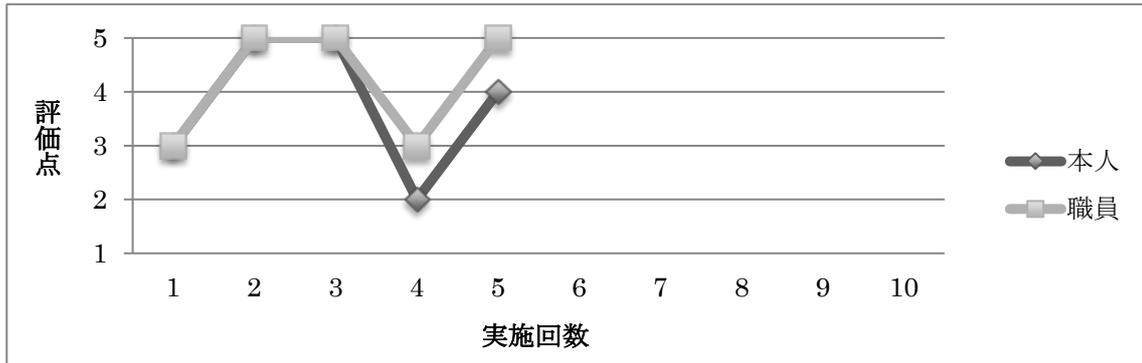
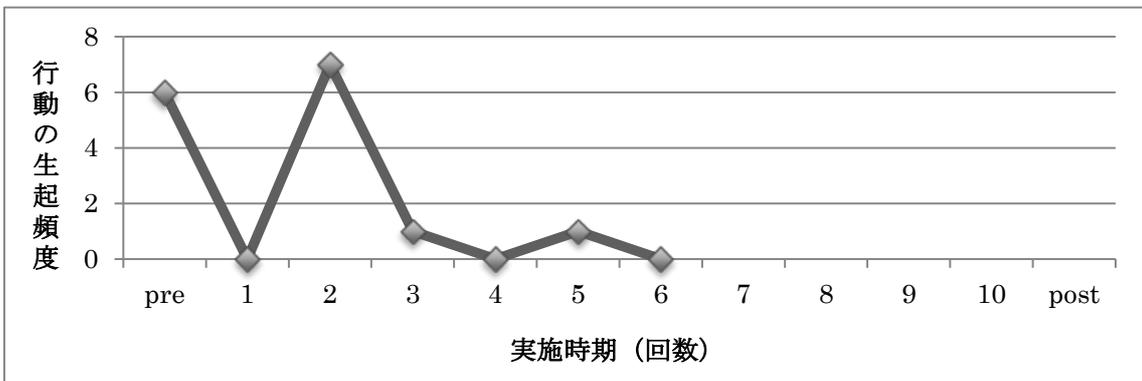


Fig. 2 課題行動の生起頻度

- 対象児 A (観察場面：集団活動の開始・全体説明～第一試行時)



- 対象児 B (観察場面：集団活動場面の終了・結果発表～活動の切り替え時)

